

東アジア史上最初の遊牧民族による國家を建設した匈奴の重要性については今さら申しあげる必要もない。匈奴に關する研究またこれまで數多くの内外の學者の手によってなされてきたが、今こゝに新に内田先生多年の研鑽の成果である本書をえたことを先ず何よりの喜びとしたい。本書には「南匈奴に關する研究」、「匈奴西移考」、「匈奴の人種體型について」、「フン匈奴同族論研究小史」、「匈奴源流考」、「匈奴史雜考」の六つの論文が收められてある。どの一篇をとりあげても眞摯な先生の面影に接する思いであるが、以下簡単に内容の紹介を試みたいと思う。

第一の「南匈奴に關する研究」は、遊牧民族が農耕民族の間に混融してゆく場合との様な政治上社會上文化上の變化が起るだろうかという問題を追求したものであるが、(一)南匈奴の中國移住、(二)魏晉時代の五部匈奴、(三)五胡亂及び北魏時代の匈奴、(四)北朝政局に於ける鮮卑・匈奴等諸北族系貴族の地位、の四部に互つてこの問題が詳論されている。(一)では新末後漢初の中國と匈奴との關係が先ず述べられ、ついで匈奴を襲つた饑旱と支配下烏桓民族の反叛によつて衰弱した匈奴がやがて南北に分裂する經過、その分裂が單于位繼承問題に端を發していることから匈奴における單于位繼承の原則——當初は父子相續制、前漢呼韓邪單于以後は兄弟相續制——を論究され

て南匈奴と後漢との政治的關係、南匈奴の國家につきその部族組織行政組織等を考察しつゝ内移によつてどの様な變化が齎されたか、が論求され、(二)では、後漢代ともかく自主獨立性を保つていた南匈奴が魏晉時代に入ると内部的には内移によつて從來の部族連合が弱體化して南單于の政治力が急速に薄らぎ、加えて外部的には中國側の南單于の抑留、所部の五分割等の政治的破壊作用によつて完全にその自主性を失つてゆく過程が刻明に追求されて、ついで五部匈奴の部族組織と魏晉側の統治管理にふれつゝ、こうして自主性を失つた五部匈奴人が劉氏を除いて一般に困窮の生活を送つていたことを論證されて本部を終る。(三)では先ず前趙につきその支配層が中國式に漢魏の制度の百官に任ぜられる一方同時に匈奴古來の官階にも任ぜられたこと、この匈奴式官階が爾後非匈奴族間にも用いられて、これが大單于の繼續と並んで五胡諸國の性格上重大な意味を持つことを説かれ、後趙については石氏の出自が朔室なる地方に移住した匈奴であつたゝめに羯と呼ばれた所以を明かにし、從來の支配層族以外の出自であるために強力な部族の背景を持ちえなかつたこと、そのため配下に漢人を重職に居らしめなければならなかつたこと、支配下遊牧民の増加に伴つて胡族中心の政策がとられて、これが遂に漢人革命にまで發展して行つたこと等を考察され、ついで涼夏兩國内における匈奴の状態から南單于の一族で後漢に活躍した左賢王去卑の末に當る夏の赫連氏をとらえて、この種族における混血の問題が取りあげられ、既に中國皇帝の權威を確立した匈奴君主は從來と異つて自由に姻族を擇び、その限り赫連氏が種族的純粹性の點で甚だ低位のものであつたと論證されている。これに續いて五胡亂時代の單于政治の内容と拓跋氏と匈奴との關係、匈奴部酋が次第に中

國の名門化し、加えて北魏道武帝のつた遊牧部族の解散、編民等によつて匈奴系人民また次第に中國民化してゆく経過が詳述される。四ではこの北魏による部民の解散と生れてきた北族系貴族に對する北魏の冷遇、邊境北族の賤民化が先ず考えられ、ついで齊周における北族の優位の恢復という點が論證されて本論を終つてゐるが、史料の縦横の驅使による論證の明確さと特に匈奴の部族組織就中その支配種族の解明、その中國化の過程については極めて多くの示教を受ける點を含んでゐることを申しのべるに止めて次に移る。

第二の「匈奴西移考」は、北匈奴が從來云われる様に、後漢和帝の永元三年金微山の失敗後直ちに康居の地に逃れたのではなく、後漢一代は大體烏孫の地に移り住んで、ついでこれが一度キルギスステップ北部に移つてから晉初になつて大擧康居シルダリヤの地に移駐したことを明かにし、北匈奴の奄蔡即ちアラン征服について、これまでヒルトの匈奴同族論のもとになつた魏書・周書の粟特傳の記事の正當性を立證してヒルトの所説を補強しつゝ、文献的に匈奴同族論の裏付けを試みられたもの。

第三の「匈奴の人體型について」は從來闕却されていたこの問題につき、中國側の文獻からも肖像遺骨の面からも、どうしても匈奴がモンゴロイドとは考えられないことから匈奴はコーカサス人種(少くとも明かに非モロコ系)と斷定され、ついで西方のフンが文獻の傳える所からも、ハンガリーのモンセントヤーノスの發掘によつて得られた多數のフン人骨の調査の結果からも、これがモロコ種と考えられることから、西史のフンはモロコ種と考えられて、この矛盾の解決として西遷途上における匈奴内の支配種族の交替と從來の支配種族(コーカソイド)の殘留悦般國建設という一つの假説を提

唱されたものである。

第四の「フン匈奴同族論研究小史」は今半世紀の主として同族非同族に關する研究経過を回顧しつゝ、明日に残された課題を概観されたもので、ヒルト説が中亚、ヨーロッパの史料によつて續々と補強された経緯、これに反對する白鳥説は誤つてゐること、言語學上より見ても從來のフン語をフィソウゲル語とする學説は影をひそめて、近年フン語研究がフン語系のチュヴァン語の解明とハンガリー語中のアルタイ語要素の解明に進められて、フン匈奴の言語が共にアルタイ語の一であつたと考えられて、言語的にフンと匈奴の言語が異つていたとする所説が覆えされてきた経過を述べられ、考古學的遺物の面からも匈奴の西遷にフンの關係は次々と立證されたが、たゞ人種的に東亞の匈奴とフンのそれとの相違をどう調和してゆくか、この點に大きな明日への課題が残されてゐると結ばれてゐる。

第五の「匈奴源流考」は漠北にあつた遊牧諸部族と匈奴との關連、匈奴の成立等について述べられたもので、匈奴の初現と周代の戎狄との關係を述べつゝ、周代の蠻狄と匈奴とは全く同一のものとは考えられないが、同一系統の類似の民族で漠北の種族連合體の主體が周代の蠻狄から戰國以降匈奴に移つて行つたものと云われ、胡と匈奴の關係については胡が一つの大きな内容の人體名であつて匈奴はその中に含まれる一種族、或は數種の連合體の名であつたと解釋される。ついで匈奴という名稱は「匈奴」という名詞は元來は匈奴が種族のトリーテム獸と考えていた豕形有翼のグリフィンの動物で、このトリーテムを中心とする小種族の名が匈奴と呼ばれた。それがやがて大種族連合體の國家に發展するにつれて本來の中心小種族は屠各に權力を表象する毛旗を持つ部族、という普通名詞で呼ばれるよう

になつて、匈奴が連合體の名前として呼ばれるようになったものではないか、と推論されたものである。

第六の「匈奴史雜考」は匈奴人の經濟生活、建造物、匈奴時代の交通、人口、法律、慣習等について詳細に論じられたもので、就中、颯脱に關する考究は極めて重要である。

以上が本書の極めて大まかな内容であるが、よく著者の溫健確實な學風を反映して後學のため、どれ程蒙を啓いてくれるものであるかわからない。第一の「南匈奴に關する研究」は多少問題のアクセントが片寄りすぎたのではないかとも思われるが、著者が斷つて居られるので謂わすもがな希望であるが、それが中國古代史形成の上でどの様な役割を果していたのかが一層明かにされたいと思わなでもない。遊牧民族と農耕民族との關係についても、遊牧民族の農耕社會侵入については説かれる通りであるが、匈奴に關する限り和平を求めたのは食糧難の時に限ると申されたことに首肯できない。これも大きな原因ではあるが、中國側からの賜與という點に關して一人當りにすれば年絹織物僅か三四糧弱と云われる、とすればその殆どが支配者の手に渡つたであらうから、實は酋に歸し寇は衆に歸すということから考えて中國側に和平を求めるのは強ち匈奴の食糧難の時だけとは限らないのではなからうか。むしろ兩者間の力關係、或は遊牧民族内の權力構成、秩序の面に和平、侵寇の原因は求められるべきではないだらうか。なお人種體型の問題についても多くの問題が残つていて、今後アジアの地において多くの匈奴人骨の發見を俟たねばならないが、廣義狹義の匈奴の使い分け、支配被支配種族間の人種の社會構成的關係等々多くの問題が残されているし、匈奴の名稱についても匈奴皮に關する記載がトートムとして重要な物

である限り他に何らかの記載が残つていて然るべきではなからうかとも思われるが、こゝにも申される通りなお問題は残されている。なおいろ／＼お伺ひしたい問題もあるが、かつて先生の講筵に侍して次々と展開される明確な考證と理論につく／＼學問の深さの測り知れないことを嘆じたことであつたが、今こゝに淺學の蕪雜の言葉を列べて却つて先生の眞意を誤り傳えることを恐れるものであるが御寛恕を乞ひつゝ紹介を終りたいと思う。本書所收の諸論文は昭和八年以來の既出の論文を大部分基にされたものであるが極めて注意深く手を加えられてある。その一々は申し述べなかつた。匈奴史研究今後の課題はなお多い。匈奴史のみでなくアジア遊牧民族史の持つ歴史的意義はまた餘りにも大きい。今後の御教導と御研鑽を祈つてやまない次第である。

(林 章)